

国木田独歩

忘れえぬ人々



忘れえぬ人々

多摩川の二子ふたごの渡しをわたって少しばかり行くと溝みぞ
 口ぐちという宿場がある。その中ほどに亀屋という旅人宿はたごやが
 ある。ちようど三月の初めのころであつた、この日は大
 空かき曇り北風強く吹いて、さなきだに淋しいこの町が
 一段と物淋しい陰鬱な寒そうな光景を呈していた。昨日きのう
 降つた雪がまだ残っていて高低定まらぬ茅屋根わらやねの南の軒
 先からは雨だれが風に吹かれて舞うて落ちてゐる。草鞋わらじ
 の足痕あしあとに溜たまつた泥水どろみずにすら寒そうな漣さざなみが立たつてゐる。
 日が暮れると間もなく大概の店は戸を閉しめてしまつた。

闇くらい一筋町がひっそりとしてしまった。旅人宿だけに亀屋の店の障子には燈火あかりが明あかく射さしていたが、今宵こよいは客もあまりないと見えて内もひっそりとして、おりおり雁頸がんくびの太そうな煙管きせるで火鉢の縁たをたたく音がするばかりである。

だしぬけに障子をあけて一人の男がのっそり入ッて来た。長火鉢に寄っかかッて胸算用に余念もなかつた主人あるじが驚いてこちらを向く暇もなく、広い土間みあしを三歩みあしばかりに大股に歩いて、主人の鼻先に突つたツた男は年ごろ三十にはまだ二ツ三ツ足らざるべく、洋服、脚絆きやはん、草鞋わらじの

旅装なりで鳥打ち帽をかぶり、右の手に蝙蝠傘こうもりを携え、左に小さな革包かばんを持ってそれを脇に抱いていた。

「一晩厄介になりたい」

主人は客の風采みなりを視みていてまだなんとも言わない、その時奥で手の鳴る音がした。

「六番でお手が鳴るよ」

吼ほえるような声で主人は叫んだ。

「どちらさまでございます」

主人は火鉢に寄っかかったままで問うた。客は肩を聳そびやかしてちよつと顔をしがめたが、たちまち口のほとりに

ほほえ
微笑みをもらして、

「僕か、僕は東京」

「それでどちらへお越しでございますナ」

「八王子へ行くのだ」

と答えて客はそこに腰を掛け脚絆の緒ひもを解きにかかった。

「旦那、東京から八王子なら道が変でございますねエ」
主人は不審そうに客の様子を今さらのように睨ながめて、
何か言いたげな口つきをした。客はすぐ気がついた。

「いや僕は東京だが、今日東京から来たのじゃアない、

今日は晩おそくなつて川崎を出た発たつて来たからこんな暮れ
てしまったのさ、ちよつと湯をおくれ」

「早くお湯を持って来ないか。へエ随分今日はお寒かつ
たでしょう、八王子の方はまだまだ寒うございます」

という主人の言葉はあいそがあつても一体の風つきは
きわめて無愛嬌ぶあいききょうである。年は六十ばかり、ふとつた体軀からだ
の上に綿わたの多い半纏はんてんを着ているので肩からすぐに太い頭
が出て、幅の広い福々しい顔の目眦まなじりが下がっている。そ
れでどこかに気むずかしいところが見えている。しかし
正直なお爺やじさんだたと客はすぐ思った。

客が足を洗ッてしまッて、まだ拭ききらぬうち、主人は、

「七番へ御案内申しな！」

と怒鳴どなツた。それぎりで客へは何の挨拶もしない、その後姿を見送りもしなかった。真黒な猫が厨房くりやの方から来て、そツと主人の高い膝の上に這はい上がって丸くなつた。主人はこれを知っているのかいないのか、じつと眼をふさいでいる。しばらくすると、右の手が煙草箱たばこいれの方へ動いてその太い指が煙草を丸めだした。

「六番さんのお浴湯ゆがすんだら七番のお客さんを御案内

申しな！」

膝の猫がびっくりして飛び下りた。

「ばか！ 貴様に言ったのじゃないわ」

猫はあわてて厨房の方へ駈^かけて行ってしまった。柱時計がゆるやかに八時を打った。

「お婆さん、吉蔵が眠そうにしているじゃないか、早く被^あ中^ん炉^かを入れてやってお寝かしな、可愛^あそうに」
主人の声の方が眠そうである、厨房の方で、

「吉蔵はここで本を復^さ習^らっていますじゃないかね」
お婆さんの声らしかった。

「そうかな。吉蔵もうお寝よ、朝早く起きてお復習いな。お婆さん早く被中炉を入れておやんな」

「今すぐ入れてやりますよ」

勝手の方で下婢とお婆さんと顔を見合わしてくすくすと笑った。店の方で大きな欠伸あくびの聲がした。

「自分が眠いのだよ」

五十を五つ六つ越えたらしい小さな老母が煤くすぶった被中炉に火を入れながら眩つぶやいた。

店の障子が風に吹かれてがたがたすると思つたとパラパラと雨を吹きつける音が微かすかにした。

「もう店の戸を引き寄せておきな」と主人は怒鳴って、舌打ちをして、

「また降って来やあがった」

と独り言ひとごとのようにつぶやいた。なるほど風が大分強くなつて雨さえ降りだしたようである。

春先とはいえ、寒い寒いみぞれ霰まじりの風が広い武蔵野を荒れに荒れて終夜よもすがら、真闇まつくらな溝口ほの町の上を哮え狂つた。

七番の座敷では十二時過ぎてもまだ洋燈ランプが耿々こうこうと輝いている。亀屋で起きている者といえはこの座敷の真中で、

差し向かいで話している二人の客ばかりである。戸外は風雨の声いかにも凄まじく、雨戸が絶えず鳴っていた。

「この模様では明日のお立ちは無理ですぜ」

と一人が相手の顔を見て言った。これは六番の客である。

「なに、別に用事はないのだから明日一日くらいここで暮らしてもいいんです」

二人とも顔を赤くして鼻の先を光らしている。傍の膳の上には煖陶が三本乗っていて、盃には酒が残っている。二人とも心地よさそうに体をくつろげて、胡座をかいて、火鉢を中にして煙草を吹かしている、六番の客は

袍卷かいまきの袖から白い腕を臂ひじまで出して巻煙草の灰を落とし
ては、喫すっている。二人の話しぶりはきわめて卒直であ
るものの今宵初めてこの宿舎やどで出合つて、何かの口緒いとぐちか
ら、二口三口襖ふすまじ越しの話があつて、あまりの淋しさに六
番の客から押しかけて来て、名刺の交換が済むや、酒を
命じ、談話はなしに実が入つて来るや、いつしか丁寧な言葉と
ぞんざいな言葉とを半混ぜに使うようになったものに違
いない。

七番の客の名刺には大津弁二郎とある、別に何の肩書
もない。六番の客の名刺には秋山松之助とあつて、これ

も肩書がない。

大津とはすなわち日が暮れて着いた洋服の男である。
 瘠形^{やせがた}な、すらりとして色の白いところは相手の秋山とは
 まるで違っている。秋山は二十五か六という年輩で、丸
 く肥えて赤ら顔で、目元に愛嬌があつて、いつもにこに
 こしているらしい。大津は無名の文学者で、秋山は無名
 の画家で不思議にも同種類の青年がこの田舎^{いなか}の旅宿^{はたごや}で落
 ち合つたのであつた。

「もう寝ようかねエ。随分悪口^{あつこう}も言いつくしたようだ」
 美術論から文学論から宗教論まで二人はかなり勝手に

しやべって、現^{いま}今の文学者や画家の大家を手ひどく批評して十一時が打ったのに気がつかなかったのである。

「まだいいさ。どうせ明日^{あした}は駄目でしょうから夜通し話したってかまわないさ」

画家の秋山はにこにこしながら言った。

「しかし何時^{いくじ}でしょう」

と大津は投げ出してあつた時計を見て、

「おやもう十一時過ぎだ」

「どうせ徹夜でさあ」

秋山は一向平気である。盃を見つめて、

「しかし君が眠けりやあ寝てもいい」

「眠くはちつともない、君が疲れているだろうと思つてさ。僕は今日おそ晩く川崎を立って三里半ばかりの道を歩いただけだからなんともないけれど」

「なに僕だつてなんともないさ、君が寝るならこれを借りていつて読んで見ようと思うだけです」

秋山は半紙十枚ばかりの原稿らしいものを取り上げた。その表紙には「忘れ得ぬ人々」と書いてある。

「それはほんとに駄目ですよ。つまり君の方でいうと鉛筆で書いたスケッチとおんな同じことひとで他人にはわからない

のだから」

といつても大津は秋山の手からその原稿を取ろうとはしなかった。秋山は一枚二枚開^あけて見てところどころ読んで見て、

「スケッチにはスケッチだけの面白味があるから少こし拝見したいねエ」

「まあちよつと借して見給え」

と大津は秋山の手から原稿を取つて、ところどころあけて見ていたが、二人はしばらく無言であつた。戸外^{そと}の風雨の声がこの時今さらのように二人の耳に入った。大

津は自分の書いた原稿を見つめたままじっと耳を傾けて夢心地になった。

「こんな晩は君の領分だねエ」

秋山の声は大津の耳に入らないらしい。返事もしないでいる。風雨の音を聞いているのか、原稿を見ているのか、はた遠く百里のかなたの人を憶おもっているのか、秋山は心のうちで、大津の今の顔、今の眼元はわが領分だなと思った。

「君がこれを読むよりか、僕がこの題で話した方がよさそうだ。どうです、君は聴きますか。この原稿はほんの

あらまし
大要を書き止めて置いたのだから読んだってわからない
からねエ」

夢から寤めたような目つきをして大津は眼を秋山の方に転じた。

「詳しく話して聞かされるならなおのことさ」

と秋山が大津の眼を見ると、大津の眼は少し涙にうるんでいて、異様な光を放っていた。

「僕はなるべく詳しく話すよ、面白ろくないと思った
ら、遠慮なく注意してくれ給え。その代り僕も遠慮なく
話すよ。なんだか僕の方で聞いてもらいたいような心持

になつて来たから妙じやあないか」

秋山は火鉢に炭をついで、鉄瓶てつびんの中へ冷めたさ煖陶かんびんを突っ込んだ。

「忘れ得ぬ人は必ずしも忘れてかなうまじき人にあらず、見給え僕のこの原稿の劈頭へきとう第一に書いてあるのはこの句である」

大津はちよつと秋山の前にその原稿を差しいだした。

「ね。それで僕はまずこの句の説明をしようと思う。そうすればおのずからこの文の題意がわかるだろうから。しかし君には大概わかっていると思うけれど」

「そんなことを言わないで、ずんずんやり給えよ。僕は世間の読者のつもりで聴いているから。失敬、横になつて聴くよ」

秋山は煙草を啣くわえて横になつた。右の手で頭を支ささえて大津の顔を見ながら眼元に微笑を湛たえている。

「親とか子とかまたは朋友知己そのほか自分の世話になつた教師先輩のごときは、つまり単に忘れ得ぬ人とのみはいえない。忘れてかなうまじき人といわなければならぬ、そこでここに恩愛の契りもなければ義理もない、ほんの赤の他人であつて、本来をいうと忘れてしまった

ところで人情をも義理をも欠かないで、しかもついに忘れてしまうことのできない人がある。世間一般の者にそういう人があるとは言わないが少くとも僕にはある。恐らくは君にもあるだろう」

秋山はだまっつてうなずいた。

『僕が十九の歳の春の半なかごろと記憶しているが、少しからだ体軀の具合が悪いのでしばらく保養する気で東京の学校を退ひいて国へ帰える、その帰り途みちのことであつた。大阪から例の瀬戸内通いの汽船に乗って春海波平らかな内海を航するのであるが、ほとんど一昔も前のことであるか

ら、僕もその時の乗合いの客がどんな人であったやら、船長がどんな男であったやら、茶菓を運ぶ船奴ボーイの顔がどんなであったやら、そんなことは少しも憶おぼえていない。多分僕に茶を注ついでくれた客もあつたらうし、甲板の上でいろいろと話しかけた人もあつたらうが、なんにも記憶に止まっていない。

「ただその時は健康が思わしくないのであまり浮き浮きしないで物思いに沈んでいたに違いない。絶えず甲板の上に出で将来ゆくすえの夢を描いてはこの世における人の身の上のことなどを思いつづけていたことだけは記憶してい

る。もちろん若いものの癖でそれも不思議はないが。そこで僕は、春の日の閑のどかな光が油のような海面に融けほとんど漣さざなみも立たぬ中を船の船首へさきが心地よい音をさせて水を切って進行するにつれて、霞かすみたなびく島々を迎えては送り、右舷うげん左舷の景色を眺めていた。菜の花と麦の青葉とで錦にしきを敷いたような島々がまるで霞の奥に浮いているように見える。そのうち船がある小さな島を右舷に見てその磯から十町とは離れないところを通るので僕は欄に寄り何げなくその島を眺めていた。山の根がたのかしここに背の低い松が小杜こもりを作っているばかりで、

見たところ畑もなく家らしいものも見えない。寂しんとして
 淋さびしい磯ひきしおの退潮の痕が日に輝ひかって、小さな波が水際みぎわを
 弄もてあそんでいるらしく長い線すじが白刃しらはのように光っては消え
 ている。無人島むにんとうでないことはその山よりも高い空で雲雀ひばり
 が啼ないているのが微かすかに聞こえるのでわかる。田畑ある
 島と知れけりあげ雲雀、これは僕の老父おやじの句であるが、
 山のむこうには人家があるに相違ないと僕は思った。と
 見るうち退潮の痕の日に輝ひかっているところところに一人の人が
 いるのが目についた。たしかに男である、また小供でも
 ない。何かしきりに拾かごっては籠かごか桶おけかに入れているらし

い。ふたあしみあし二三歩あるいてはしやがみ、そして何か拾ろっている。自分はこの淋しい島かげの小さな磯を漁あさっているこの人をじつと眺めていた。船が進むにつれて人影が黒い点のようになってしまった、そのうち磯も山も島全体が霞のかなたに消えてしまった。その後今日が日までほとんど十年の間、僕は何度この島かげの顔も知らないこの人を憶い起したろう。これが僕の『忘れ得ぬ人々』の一人である。

「その次は今から五年ばかり以前、正月元旦を父母の膝ひざ下で祝もとってすぐ九州旅行に出かけて、熊本から大分へと

九州を横断した時のことであつた。

「僕は朝早く弟とともに草鞋わらじきやはん脚絆で元氣よく熊本を出発たつた。その日はまだ日が高いうちに立野たてのという宿場まで歩いてそこに一泊した。次ぎの日のまだ登らないうち立野を立て、かねての願いで、阿蘇山の白煙を目がけて霜を踏み栈橋を渡り、路を間違えたりしてようやく日中おひる時分に絶頂近くまで登り、噴火口に達したのは一時過ぎでもあつただろうか。熊本地方は温暖であるがうえに、風のないよく晴れた日だから、冬ながら六千尺の高山もさまで寒く感じない。高嶽たかたけの絶頂いただきは噴火口から吐き出

す水蒸気が凝って白くなっていたがそのほかは満山ほとんど雪を見ないで、ただ枯草白く風にそよぎ、焼土やけつちのあ
るいは赤きあるいは黒きが旧噴火口の名残りをかしここ
こに止めて断崖をなし、その荒涼たる、光景は、筆も口
もかなわない、これを描くのはまず君の領分だと思ふ。

「僕らは一度噴火口の縁まで登って、しばらくは凄まじすさ
い穴を覗き込んだり四方の大観をほしいままにしたりし
ていたが、さすがに頂は風が寒くって堪たまらないので、穴
から少し下りると阿蘇神社があるその傍そばに小さな小屋が
あって番茶くらいは吞ませてくれる、そこへ逃げ込んで

団飯むすびを齧かじって元氣をつけて、また噴火口まで登った。

「その時は日がもうよほど傾いて肥後の平野を立て籠こめ
ている霧靄もやが焦げて赤くなってちようどそこに見える旧
噴火口の断崖と同じような色に染まった。円錐形えんすいけいに聳そびえ
て高く群峰ぐんぽうを抜く九重嶺の裾野の高原数里の枯草が一面
に夕陽せきようを帯び、空氣が水のように澄んでいるので人馬の
行くのも見えそうである。天地りようかく寥廓りようかく、しかも足もとで
はすさまじい響きをして白煙濛々もうもうと立ち騰のぼり真直ぐに空
を衝つき急に折れて高嶽を掠かすめ天の一方に消えてしまふ。
壮といわんか美といわんか惨といわんか、僕らはだまつ

たまま一言も出さないでしばらく石像のように立っていた。この時天地悠々ゆうゆうの感、人間存在の不思議の念などが心の底から湧いて来るのは自然のことだろうと思う。

「ところでもっとも僕らの感を惹いたものは九重嶺と阿蘇山との間の一大窪地であった。これはかねて世界最大の噴火口の旧跡と聞いていたがなるほど、九重嶺の高原が急におちこんでいて数里にわたる絶壁がこの窪地の西を廻めぐっているのが眼下によく見える。男体山麓なんたいさんろくの噴火口は明媚幽邃めいびゆうすいの中禅寺湖と変っているがこの大噴火口はいっししか五穀実る数千町歩の田園とかわって村落幾個の樹

林や麦畑が今しも斜陽静かに輝やいている。僕らがその夜、疲れた足を踏みのばして罪のない夢を結ぶを楽しんでいる宮地という宿駅もこの窪地にあるのである。

「いつそのこと山上の小屋に一泊して噴火の夜の光景を見ようかという説も二人の間に出たが、先きが急がれるのでいよいよ山を下ることに決めて宮地を指して下りた。下りは登りよりかずつと勾配が緩やかで、山の尾や谷間の枯草の間を蛇のようになねっている路をたどって急ぐと、村に近づくにつれて枯草を着けた馬を幾個か逐いくついこした。あたりを見るとかしここの山尾やまのおの小路をの

どかな鈴の音夕陽を帯びて人馬幾個となく麓をさして帰りゆくのが数えられる、馬はどれもみな枯草を着けている。麓はじきそこに見えていても容易には村へ出ないの
で、日は暮れかかるし僕らは大急ぎに急いでしまいいには走って下りた。

「村に出た時はもう日が暮れて夕闇ほのぐらいころであった。村の夕暮のにぎわいは格別で、壮年男女は一日の仕事のしまいに忙がしく子供は薄暗い垣根の蔭やかまど竈の火の見える軒先に集まって笑ったり歌ったり泣いたりしている、これはいずこの田舎も同じことであるが、僕は

荒涼たる阿蘇の草原から駆け下りて突然、この人寰じんかんに投じた時ほど、これらの光景に搏うたれたことはない。二人は疲れた足を曳ひきずって、日暮れて路遠きを感じながらも、懐かしいような心持で宮地を今宵の当てに歩るいた。「一村離れて林や畑の間をしばらく行くと日はとつぷり暮れて二人の影がはつきりと地上に印するようになって。振り向いて西の空を仰ぐと阿蘇の分派の一峰の右に新月がこの窪地一帯の村落をわが物顔に澄んで蒼味あおみがかつた水のような光を放っている。二人は気がついてすぐ頭の上を仰ぐと、昼間は真白に立ちのぼる噴煙が月の光

を受けて灰色に染まっへきるて碧瑠璃りの大空を衝ついているさまが、いかにも凄まじくまた美しかった。長さよりも幅の方が長い橋にさしかかったから、幸いとその欄よに倚よつかかって疲れきった足を休めながら二人は噴煙のさまのさまざまに変化するを眺めたり、聞くとともになしに村落の人の語の遠くに聞こゆるを聞いたりしていた。すると二人が今来た道の方から空車らしい荷車の音が林などに反響して虚空に響き渡って次第に近づいて来るのが手に取るように聞こえだした。

「しばらくすると朗々ほがらかな澄んだ声で流して歩まるく馬子唄ごうた

が空車の音につれて漸々ぜんぜんと近づいて来た。僕は噴煙を眺めたまままで耳を傾けて、この声の近づくのを待つともなしに待っていた。

「人影が見えたと思うと『宮地やよいところじや阿蘇山ふもと』という俗謡うたを長く引いてちようど僕らが立っている橋の少し手前まで流して来たその俗謡の意こころと悲壮な声とがどんなに僕の情こころを動かしたろう。二十四五かと思われる屈強な壮漢わかものが手綱を牽いて僕らの方を見向きもしないで通ってゆくのを僕はじつと睥視みつめていた。夕月の光を背にしていたからその横顔もはつきりとは知れ

なかつたがその逞たくましげな体軀からだの黒い輪郭が今も僕の目の底に残っている。

「僕は壮漢の後ろ影をじっと見送って、そして阿蘇の噴煙を見あげた。『忘れ得ぬ人々』の一人はすなわちこの壮漢である。

「その次は四国の三津ヶ浜に一泊して汽船便を待った時のことであつた。夏の初めと記憶しているが僕は朝早く旅宿やどを出て汽船の来るのは午後と聞いたのでこの港の浜や町を散歩した。奥に松山を控えているだけこの港の繁盛は格別で、わけでも朝は魚市が立つので魚市場の近傍

の雑沓ざつとうは非常なものであつた。大空は名残りなく晴れて朝日うららかに輝き、光る物には反射を与え、色あるものには光を添えて雑沓の光景をさらににぎにぎしくしていた。叫ぶもの呼ぶもの、笑声嬉々ききとしてここに起れば、歡呼怒罵どば乱れてかしこに湧くという有様で、売るもの買うもの、老若男女、いずれも忙しそうに面白そうに嬉しそうに、駈けたり追つたりしている。露店が並んで立ち食いの客を待っている。売っている品ものは言わずもがなで、喰つてる人は大概船頭船方の類たぐいにきまつている。鯛や比良目ひらめや海鰻あなごや章魚たこが、そこらに投げ出してある。なま

ぐさい臭いが人々の立ち騒ぐ袖や裾に煽^{あお}られて鼻を打つ。

「僕は全くの旅客でこの土地には縁もゆかりもない身だから、知る顔もなければ見覚えの禿^{はげ}頭^{あたま}もない。そこでなんとなくこれらの光景が異様な感を起させて、世のさまを一段鮮^{あざ}やかに眺めるような心地がした。僕はほとんど自己を忘れてこの雑沓の中をぶらぶらと歩るき、やや物静かなる街^{ちまた}の一端^{はし}に出た。

「するとすぐ僕の耳に入ったのは琵琶の音であった。その店先に一人の琵琶僧が立っていた。歳のころ四十を

五ツ六ツも越えたらしく、幅の広い四角な顔の丈たけの低い肥えたおとこであつた。その顔の色、その眼の光はちよ
うど悲しげな琵琶の音にふさわしく、あの咽むせぶような糸
の音につれて謡う声が沈んで濁よどって淀よどんでいた。巷ちまたの
人は一人もこの僧を顧みない、家々の者は誰もこの琵琶
に耳を傾ける風も見せない。朝日は輝く浮世はせわしい。
「しかし僕はじつとこの琵琶僧を眺のきめて、その琵琶の音
に耳を傾けた。この道幅の狭い軒端のきばの揃そろわない、しかも
せわしそうな巷の光景がこの琵琶僧とこの琵琶の音とに
調和しないようでもしかかもどこかに深い約束があるように

感じられた。あの嗚咽おえつする琵琶の音が巷の軒から軒へと漂うて勇ましげな売り声や、かしましい鉄砧かなしきの音と雑まざって、別に一道の清泉が濁波の間を潜くぐって流れるようなのを聞いていると、嬉れしそうな、浮き浮きした、面白そうな、忙しそうな顔つきをしている巷の人々の心の底の糸が自然の調べをかなでているように思われた、『忘れえぬ人々』の一人はすなわちこの琵琶僧である」

ここまで話して来て大津は静かにその原稿を下に置いてしばらく考え込んでいた。戸外そとの雨風の響きは少しも衰えない。秋山は起き直って、

「それから」

「もう止そう、あまり更ふけるから。まだ幾らもある。北海道歌志内うたしなの鉋夫、大連湾頭だいらんわんとうの青年漁夫、番匠川こぶの瘤あ
る舟子など僕が一々この原稿にあるだけを詳わしく話す
なら夜が明けてしまおうよ。とにかく、僕がなぜこれらの
人々を忘るることができないかという、それは憶おもい起す
からである。なぜ僕が憶い起すだろうか。僕はそれを君
に話して見たいがね。

「要するに僕は絶えず人生の問題に苦しんでいながらま
た自己将来の大望に圧せられて自分で苦しんでいる不幸

せな男である。

「そこで僕は今夜こよいのような晩に独り夜更けて燈ともしびに向つているとこの生の孤立を感じて堪えがたいほどの哀情を催おして来る。その時僕の主我の角つのがぼきり折れてしまつて、なんだか人懐かしくなつて来る。いろいろの古いことや友の上を考えだす。その時油然ゆうぜんとして僕の心に浮んで来るのはすなわちこれらの人々である。そうでない、これらの人々を見た時の周囲の光景のうち立つこれらの人々である。我れと他ひととなんの相違があるか、皆これこの生を天の一方地の一角に享うけて悠々たる行路をたど

り、相携えて無窮の天に帰る者ではないか、というよう
な感が心の底から起って来てわれ知らず涙が頬をつたう
ことがある。その時は実に我われもなければ他ひともない、ただ
誰もかれも懐かしくって、忍ばれて来る、

「僕はその時ほど心の平穩を感ずることはない、その時
ほど自由を感ずることはない、その時ほど名利競争の俗
念消えてすべての物に対する同情の念の深い時はない。
「僕はどうかしてこの題目で僕の思う存分に書いて見
たいと思っている。僕は天下必ず同感の士あることと信
ずる」

その後二年経たった。

大津は故あつて東北のある地方に住まっていた。溝口みぞのぐちの旅やど宿で初めて遇あつた秋山との交際は全く絶えた。ちよ
うど、大津が溝口に泊つた時の時候であつたが、雨の降
る晩のこと。大津は独り机に向つて瞑想に沈んでいた。
机の上には二年前秋山に示した原稿と同じの「忘れ得ぬ
人々」が置いてあつて、その最後に書き加えてあつたの
は「亀屋の主人あるじ」であつた。
「秋山」ではなかつた。

日本文学電子図書館

忘れえぬ人々

著 者：国木田独歩

制作者：宮澤一郎

底 本：「日本の文学5」
中央公論社

昭和49年7月31日 12版発行



日本文学電子図書館